

---

# 地球侵略

亮孔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

地球侵略

### 【Nコード】

N1291A

### 【作者名】

亮孔

### 【あらすじ】

人類は宇宙歴を迎え、もはや生命は地球上にしか存在しないとさえ思っていた。そんな時「D-300」基地ではリーダーに不審な物を見つける……。絶望的なこの戦いに名乗りをあげたのは「国民」だった。。。

## 第一話：レーダー

宇宙歴120年・・・

太陽系の外に位置し、地球外生命体に対する防衛基地 「D-300」

とはいってもこの基地ができてから、いや人類が宇宙にでてからというものの他の銀河系から、エイリアンなど攻めては来ず、すべての人がエイリアンなど映画の中だけの話、と思っていた。

だから防衛基地とはいっても他の所から大きな隕石がこないか異常はないか、というようなことを監視するような、監視塔のような物となっていた。

しかも隕石さえほとんどくることはなく「D-300」で任務をこなしている者達も楽な仕事だと気が抜けきっていた・・・

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

レーダーの監視員が機械をコツコツと叩き、しきりに首をかしげていた。

「おいおい、そいつはいいやつだから壊してくれるなよ。」

監視員の後ろには身なりの立派な一人の男が立っていた。どうやらここで一番偉い人らしい。

「司令官、なにやらレーダーに写っているのですが・・・」

司令官といわれたさっきの立派な男は慌てて手に持っていたコップを落としてしまった。

中に入っていたコーヒーが服にかかる。

「ああ、くそ！服が・・・」

司令官が監視員をにらむ。コーヒーのせいでいつきに機嫌が悪くなつたようだ。

「おまえなぜはやく報告しなかった！隕石だったらどうする！」

「隕石ならばとづくにしています。しかしこれは・・・」

そついうとその監視員は司令官にレーダーを見せた。

そのレーダーの上部ほとんどは「何か」で埋め尽くされていた。

「なんだこれは・・・」司令官が言った。

「故障ですかねえ？」

「だから、さっきもいったろう、このレーダーは最新式だぞ。壊れるはずがない・・・」

そついった司令官も、目の前のレーダーを見て、さも自分の言葉が信じられない、といった風に首をかしげた。

「じゃあなんなんでしょうか？レーダーに写ったものを信用するならばこれは100km超えますよ。」

司令官は自分の服に付いたシミを取りながらしきりにうなっていた。

「地球に連絡しますか？」

「ああ、たのむ。」

司令官はそういわれると今のレーダー画像のデータを地球に送信しはじめた。

「おい、まさか地球侵略者、じゃないだろうな・・・」

ふいに司令官はそうつぶやいた。

監視員が笑い出す。

「司令官、それはSF映画の見過ぎでは？」

「どうか。見ろ、こいつらの動きは隕石ではまずない・・・」

監視員はレーダーに目を向けた。確かに隕石とは思えないほど速い・

・  
「それでもエイリアンと断定するには・・・」

監視員もさすがに笑えなくなったようで、しきりに爪をかんでいた。  
癖なのだろう。

「そうかもしれないな、しかしもしエイリアンだったら俺らよりは強いだろうな・・・」

そう司令官がつばやいたときであつた。

「司令官！未確認物体からとてつもないエネルギー反応です！」

別の監視員が悲壮な声を上げる。

「すくなくとも我らに危害を加えるものだな・・・総員！配置につけ！」

「司令官、このエネルギー・・・とてつもない数値です・・・」

監視員がおびえた様子で言った。

「この数値だと我々までとどきます・・・」

「我々ならまだました・・・おそらくこいつらは俺らをねらっているんじゃない・・・」

「ど、どういふことです？」

監視員が訪ねた。監視員の手は震えていた。

「地球ををつぶす気だ・・・この基地など眼中にない・・・」

司令官はうなだれてそう答えた。

「至急地球に連絡を！もう遅いかもしれんな・・・」

監視員はそういわれるとビクツとして慌てて送信を開始した。

「総員に次ぐ！今すぐにここを離れよ！」

そう命令を告げたときだった。別の監視員が叫んだ。

「未確認物体からのエネルギーが放出されました！」

だがその報告はあまり意味をなさなかった。目の前に見えていたからだった。

目の前のガラスには一面が光の世界に入っていた・・・

地球を壊してなんになるというんだ・・・

と司令官はつぶやいたが、周りの叫び声でかき消された・・・

## 第一話：リーダー（後書き）

今回はSF物をかいてみました。これからこの連載の応援のほうよろしく願っています。



## 第2話：光

空は透き通るように青かった・・・その何もない空を鳥たちがうれしそうに羽を伸ばし、自由にそらを飛んでいた。

孝太はその景色から目を離すと深呼吸をした。うん、と背伸びをする。それだけで自分が今、学校から家に帰宅することも忘れさせてくれた。

校門の周りにはたくさんの人がいた。それぞれが友人と談笑していた。

孝太は別に友がいらないわけではなかった。ただ帰り道で、空を見るのが好きな男であったため、いつしか一人で帰宅中に空を見るのが習慣となっていた。

門に近づくにつれて、彼をどうしようもない不安が襲い始める。

「今日は・・・いないみたいだな・・・？」

ふう、と胸をなでおろす。と、いきなり肩をドンと押された。

「こうた」

しまった、後ろか・・・一気に心が沈む。

「明菜・・・？」

わかつてはいながらも、一応そう尋ね、孝太は後ろを向いた。

そこには一人の女が立っていた。少しふてくされた顔をしている。

「待ってて、って言ったじゃんか！」

「俺は一人で帰りたいから・・・」

「さびしい人だねえ。空はなにか言ってる？」

明菜は家が近いせいか幼いころからかなり一緒に遊んでいた。俺には分からないがクラスの人気者で、男からもかなり告白されるらしい。

だが、俺はこいつを一度も好きになるといったようなことはなかった。彼女も男には興味がないようで、いままで告白された誰とも付き合っていなかった。

俺のことは馬鹿にしてるし・・・どこがいいんだこんな奴。

孝太は明菜の言ったことを無視して、前へ進んだ。

「ちょ、ちよつと、無視?!」

後を明菜がついてくる。

かまわず歩を進める。

「ついてくるなよ。」

冷たく言っただつたが、分からなかったみたいだ・・・

「私の家はこっちですから、別についていってわけじゃないですけど。」

周りには大きな建物などなく、太陽が二人の長い影をつくった。

急に孝太は走り出した。

明菜も走ってついてくる。

「やっぱりついてきてんじゃねえかあ!」

孝太は息をきらせながら言った。

「ち、違っわよ!これが普通のスピードなの!」

なんて言い訳だ・・・明菜の顔もかなりつらそうに見える。

と、いきなり明菜が立ち止まった。

「どうした?もう駄目か?」

孝太はふん、と鼻から軽く息を出した。

「違っわよ!馬鹿!あれよ、あれ。」

明菜は空を指差した。

「孝太、星に詳しいでしょ?あれ何かな?」

確かに明菜の指差す方向にはかなり明るい星があつた。その星は透き通ったまだ青さが残る空にぼつり、と浮かんでいた。

最初孝太は金星かと思った。しかし方向が違う。

「分からないな・・・」

孝太が答える。

「孝太でもわかんないの?なんだろ?きれいな星だね。」

明菜はうつとりとした顔をした。もしかしたらクラスの男どもはこういうところが好きなのかもしれない。

ひゅう、と、ふいに冷たい風が吹いた・・・そばにあった木の葉が揺れる・・・

孝太にはその星の光がなぜかいやな光に感じた。孝太はじっとその星を見つめていた。というよりも目が離せなかった・・・動いている・・・

孝太は目の前の現象が信じられないという風に目をこすった。そしてもう一度空に視線を戻す。

やはりうごいている・・・

「隕石かな？」

明菜が不安そうな声で言った。どうやら彼女も気づいたらしい。と。明菜が言い終わったとたん、地面が小刻みに揺れだした。

視界が揺れる。周りにあった木がざわつきだす。

「何よ！これ！」

明菜のおびえた声が振動の音に混じって聞こえる。

「星」は確実に近づいている。そして振動がひどくなる。

「伏せろ！明菜！」

孝太は自分でも驚くほどに大きな声を出していた。

明菜は何がなんだか分からないといった様子で地面に伏せる。

「星」は音を出し始めた。隕石の音とはまた違う、鉄をこすり合わせたような音だった。

星？いや違う。星ではなかった。近づくにつれてそれが分かった。

それは、そう、光だった・・・

まるで太陽の光が降り注いだようだった・・・しかし太陽の光のやさしさとは別の冷たい感じをもっていた。

「くそ！」

孝太は明菜をかばうような形で地面に倒れた。明菜は震えていた。体を通してそれが分かった。

光ははるかかなたへ去っていく・・・スッと光が消えたかと思うと、周りの音が消え、急に静かになったような気がした。そして。

ただ、周りは爆風に包まれた・・・

## 第2話：光（後書き）

ご指摘があったため、一部を変更させていただきました。ありがとうございます。

### 第3話：戦人

相変わらず、空は青く透き通っていた……。

そして、その空と同様に地上には何もなかった。しかしその光景は空のように美しいとはいえなかった。地面はひび割れ、地上を走る動物も虫もいなかった。

しかし荒れ果てているにもかかわらず、そこにはたくさんの人がいた……。最初、彼らはどこかの兵隊かと思った。手には黒く光る武器を持ち、表情は厳しかった。「最初」といったのには訳がある。彼らは兵隊特有の軍服がなかったのである。彼らが着ていたのは、汚れてはいるが一般人の着るような平素な服であった。まるで彼らは反乱を起こしている、「レジスタント」のようであった。

その先頭には男が立っていた。

「偵察部隊！敵の状況は！」

男はそう言つて、無線に耳を傾ける。しかし無線からは何の返事も来ず、ただノイズがザアザアとなっているだけであった。

「隊長……。あきらめましょう……。」

その男の横にいる小柄な男がいかに悔しそうに言った。

「孤立した……。敵に囲まれている。」

隊長といわれた男は無線から耳を離して、そういった。

すると、遠くから一人の男がやってきた。疲れているのか、よろよると動いている……。

「偵察隊がきたぞお！」

疲れた様子の男はどうやら偵察兵らしい。

隊長が駆け寄る。偵察兵は両脇をほかの兵に支えられている。

「どうした、なにがあった！」

よく見るとその偵察兵は体中から血を流していた……。

「す、すいません……。第1、2、3偵察部隊及び第2攻撃部隊は全滅しました……。」

「くそつ……。」「何体」だ……。?」

みるみるその隊長の顔色が悪くなる。

「2体です……。それに250匹……。」「

偵察兵はそう言うのと、うつ、と言って、血を吐いた。

「おい、誰かこいつをはこんでやれ!」

そついうとその隊長はがつくりとうなだれた。

「こちらには後何人いる?」

隊長は先ほどの小柄な男に聞いた。

「約三千人です……。」

「厳しい戦いだな……。」

数では勝っていた。しかし、数だけだ……。隊長はそう思った。

「バグ（虫）です!数250!」

丘の上にいた兵が答える。それは悲鳴に近かった。

「戦闘隊形!」

そついつて隊長は丘に駆け上がる。

丘の下には広い荒野が広がっていた。先ほどの何もない荒野だ。しかし今はその大半を「何か」が隠していた。

それは少なくとも人ではなかった。さつき彼らが言ったように虫、といったほうがよいかもしれない。

荒野に広がっていたのは2mはあるうかという大きな足が6つある生き物であった。顔にはいかにも切れ味のよさそうな牙が備わっている。それが群れをなして、ものすごいスピードでこちらに向かっている。地球上の生物では考えられないほどの速さであった。

「まだマンティス（カマキリ）はきてないな……。みなの子ここが修羅場だ!迎え撃て!」

そう隊長は叫ぶと自身も銃を手にした。銃先が太陽に照らされ、きらりと光った。

「虫」が迫る……。その不気味な姿だけでもう味方を圧倒してい

た。

手が震えていた。銃先は小刻みに揺れていた。

隊長はその震えをグツとこらえて叫んだ。

「射撃開始！撃て！」

その言葉が発せられたとたん、3000の銃は一斉にうねりを上げた。

銃先からは火花が散り、鉄の玉が虫たちに向かって光のように飛んでいく。

しかし、どうやらこいつらをこの武器で倒すのは難しらしい。その光をたくさんに受け、緑色の液体を出して、倒れるものもいたが、ほとんどの銃弾があたってもその硬い殻のようなもので跳ね返されていた。

さらに虫が迫る。兵達は少し後ずさりをはじめたが、遅かったようだ。

虫は目の前に「獲物」が来ると、急に牙を見せ、兵に噛み付いた。兵からは赤い液体が噴出す。その兵は暴れていたが、やがて力なくぐったりとなった。

あちこちで悲鳴が聞こえ出す。その悲痛な声はまるで地獄にいるようだった。

その地獄の中でも兵達は必死に銃を乱射していた。しかしほとんどのものが銃弾を使い切ることなく、地面に倒れ、あるいは空中に舞った……。

「隊長！やはり無理です！兵が足りません！」

先ほどの小柄な男が叫ぶ。

「くそ……。もはやこれまでか……。」

隊長はうなだれた。もはや自身の弾薬も少なくなり体は傷だらけだった。

兵はみるみる少なくなり、三千人もいたはずが今はそのほとんどが地面で動かなくなっていた。と、小柄な男が叫んだ。



「隊長！人が見えます！！援軍です！」

かなり小柄な男は驚いているようだった。確かに驚きたくもなる。ここは敵陣のど真ん中なのだ。味方など当の昔にあきらめていた。小柄な男が指差す方向を隊長は見た。明るい空と一体になっている丘の上には確かに人が集まっていた。彼らの中心には旗が立っていた。

旗には狐の顔のようなシルエットがある。

「狐の牙か！！」

隊長は叫んだ。

「これで戦況は変わったな！われらの勝ちだ！」

小柄な男はわけが分からないといった風にきよんとしているが、隊長は続けてそう言った。

狐の牙といわれた丘の集団の先頭には二人の男女が立っていた。

男は空を見ていた。どうやら空が好きらしい。頬には古傷があった。あの空好きの面影が残っていた。

「孝太、敵は200くらいよ。どうする？」

女は、空を見ていた男に尋ねた。しかし返事は分かっているのだろう。女は後ろにいる人達に、もう指示を送っていた。

「味方が虫を独り占めにしてるんだ。分けてもらおうぜ、明菜。」

孝太と呼ばれた男は頬にある古傷をポリポリと掻きながら、そう言った。

### 第3話：戦人（後書き）

ご指摘を受け、一部を変更させていただきました。ありがとうございます。

なんとか第3話までできました。誤字・脱字等ありましたら、言ってやってください！

ご感想いただければ幸いです。

#### 第4話：刃が光る時

丘の上はシンと静まり返っていた。丘の下ではもはや壊滅状態に近い簡単な基地が見えた。いや、基地というよりも破壊された廃墟の街にあの兵達は立てこもっていたのである。その真ん中で隊長らしき人物と小柄な人が手を振り合図を送っていた。その隊長の兵ももはや二千にも満たなかった。

孝太は腰にある鞘から刃渡り30cmもある「ナイフ」を取り出した。すると後ろにいた兵達が銃を前に構える。全員の銃の先にはやはり「ナイフ」（銃剣）がついていた。

「お前ら遅れるなよ・・・。」

孝太はそついうと走り出した。

「あの者達はなんなんですか？」

小柄な男は隊長にむかって尋ねた。数はどうみてもせいぜい五百人。今までの戦いから見てとてもかなう人数ではなかった。

狐の牙。隊長は落ち着いた表情でいった。「やつらを知らないとは驚きだな。」目の前に来た虫に銃弾を十分に浴びせながら少し皮肉っぽく小柄な男に言った。虫から緑色の液体が噴出しその体は地面に沈んだ。

「奴らの援護に向かう！」隊長はそう叫んだ。

小柄な男は狐部隊（狐の牙のこと）を見た。五百人の人々は走り出している。虫たちも気づいたようで100匹ほどが狐部隊にむかっていた。

と、前方から甲高い鳴き声が突如聞こえた。聞きなれた嫌な音だ・・・。小柄な男はその声に反応するかのように前を向きライフルを構えた。予想どおり前には虫がいた。虫が牙をむき出してうなっている。

小柄な男は自分に飛び掛ろうとした虫の口の中にライフルを突っ込

み発砲した。ズドンという重い音とともに虫の体はバラバラに吹っ飛んだ。緑の液が体にかかる……。

「くそ！洗ったばっかだぞ……。」小柄な男は服についた殻の破片を払うと視線を狐部隊に戻した。

しかしそこには虫はいなかった……。

狐の牙の応戦に向かった100匹ほどの虫はすべて地面に倒れていた。

「馬鹿な……。」自分が一匹と戦って狐部隊から視線をはずしたのはほんのわずかな時間でしかなかったはずだ……。第一、狐部隊のほうからは銃声などほとんど聞こえなかった。

奴らはな……。隣にきた隊長が話しかけた。「銃をあまり使わん。奴らの主な武器は……。」隊長は自分の腰にコンコンと叩いて言った。

「ナイフだ。」

「ナイフ?!」小柄な男は驚いた。そんな武器でとても虫に応戦できとは思えない。自分も持っているが、敵の前で使ってみようとは思わなかった。

「まあ、彼らが言うには銃よりよっぽど役に立つそうだ。」

孝太は目の前に突進してくる虫の呼吸を聞いていた。1, 2, 1, 2。自分達とは違うテンポの呼吸なのにそれもまた自然に聞こえてくるようになった。

虫が噛み付こうとする。孝太はそこでかい図体を蹴倒した。虫が倒れる。

虫の甲羅と甲羅の隙間が見える。孝太はそこにもうすでに緑色に染まっているナイフを思いっきり突き刺した。見慣れた緑が噴出す……。すると虫はすぐに動かなくなってしまった。

ヒュン、とナイフで空を切り緑の液体を払った。地面は緑で染まっていたが乾いた土によってすぐに吸収されてしまった。

ポン、と肩を叩かれる。振り向くとそこには見慣れた幼馴染の顔が

あつた。

「何匹？」幼馴染は少し笑って尋ねる。

「12。明菜は？」

「残念、15匹」明菜は孝太の目の前にVサインをつくった。

孝太の目の前には虫はいなく自分の部下とさっきの隊長がわずかな部下とともにたたずんでいるだけだった。

すまなかつたな。

隊長の第一声はこれだった。孝太は少し肩をすくませると、少し笑って、「なに、獲物を分けてもらっただけです。」と、言った。

「はっは獲物、か。あきれた奴らだ、まったく。」隊長はほとんど無傷の孝太を見て言うとは大声で笑った。

孝太の後ろにいた兵もそんなに疲れた様子はない。どれだけの訓練を受けてきたかがうかがえる。

「死傷者は？」

「はあ、死者はいませんね。重症が一名、軽症が五名ほど・・・。」  
孝太がそう聞くと部下の一人がそう答えた。

まあまあだな、負傷兵を治療しておけ。孝太は空を見上げてそう言った。あつちの隊長の兵はもうほとんどいなく、戦闘できる状態ではなかった。

「まいったな。」隊長はさも残念そうに言った。

ここはまだ危険です、安全な土地まで送りますよ。

孝太がそう言おうとした時だった。

ズン。

地が鳴った。まるで大きな太鼓が鳴っているかのようなような衝撃が孝太達を襲った。

孝太はとつさにナイフがあるのとは反対側の腰にある黒く光るものを取り構えた。ロケット弾を発射する武器だ。小型化されていて、50cmほどの大きさである。

「マンティスもいるのか！」隊長にむかって叫ぶ。

「ああ、二体だ。君たちも銃は持つんだな。」隊長は額に汗をかきながらも冷静をたもとうとしていた。

「奴らは特別だ！―戦闘準備！―」

孝太は部下にそう叫ぶと小型砲の残り弾数を数えた。五発……。ギリギリだな……。孝太は前を向いた。隊長の残りわずかな兵も戦闘態勢には入っているがみんな震えている。ズン。

また地響きがしたかと思うと目の前に突如大きな建物が現れた。いや、建物ならまだましな方か……。そこには巨大な「生き物」がいた。高さ20mはあるだろうか。かまきりのような鋭い鎌を持っていた。情報どおり二体いる……。

耳をふさぎたくなるような甲高く大きい声が響く。孝太は銃を構えると叫んだ。

「撃て！」

孝太は小型砲のトリガーを引く。ドン、という音と共に白い煙がすつと伸びていく。後に続いて狐の牙の兵士の砲弾と隊長達の兵の弾が飛んでいった。

たくさん弾はマンティスと呼ばれた巨大な生き物に吸い込まれるように飛んでいくと、ズドンという音がして巨大な生き物のうめき声が聞こえた。

隊長の兵が歓声をあげる。

前方は煙でマンティスは見えなかったがウウウという音が鳴っている。

「まだまだ……。ふせるー！」

孝太は後ろにいる兵達に叫んだ。

孝太の頭上を光が飛んだ。いや、地獄の炎の方が正しいであろう。光は孝太の頭上を越えて隊長の兵達に当たった。キュンという音がしたかとおもうと光は爆発し地面ごと兵達は吹っ飛んだ。

孝太や隊長の頭上から砂やすでに「かけらとなった物」がふつてきた。

「撃てえ！」

孝太はそれにかまわず叫んだ。  
またすうっと白い煙が放たれる。今度は命中すると巨大な「生き物」は大きく静かに倒れた。

砂が舞い上がり孝太たちの視界を塞いだ。

「気を抜くなまだ一体いる！発砲準備！」

兵たちはまたすぐに銃を砂ぼこりで見えない前へと構えた。

小型砲を持つ手に汗がにじむ。

視界が晴れる・・・。

しかしそこにはあの巨大な化け物はいなかった。

かわりに動かなくなったその化け物の上に葉巻の煙を吸って立っている男が一人いただけであった・・・。

#### 第4話：刃が光る時（後書き）

久しぶりの投稿です。はぁ・・・時間がねえや^^；  
みていただいて感想でもいただければ幸いです。

あと、サブタイトルの「刃」は「やいば」と読みます。まあ、一応  
言っておくだけです・・・。



## 第5話：ヒゲツラ

男は葉巻をマンティスの上に捨てると孝太たちの元から離れるようにして歩いていった。

その男の先には小さな小屋があつた。

「この明菜様を無視するとはいい度胸だなあ。」

そうふざけて言った明菜の顔には汗がにじんでいた。隊長たちまで驚きで何もいえないようだ。

マンティスを一人で倒した……。孝太はそんな人間を今まで見たことがなかった。いや、ここにいる全員がそうだろう。

マンティスはいわば怪物だ。少々の銃弾や砲弾ならびくともしない。それを一瞬で……

「いこう。」

孝太は小屋に向かって歩き出した。自分がひどく興奮しているのがわかった。スピードが、速くなる。

「え、ちよっ、ちよつとまってよ!」

明菜がそう叫んでついてきた。

いつつもついてくんなよ。孝太はそう思ったが明菜が必死についてくるのを見てそう言えなかった。

しかし待っているのもなんだか変な気がしたので走ることにした。

「聞こえてないのかよ。いじわる!」

無視無視。

おそらく手作りであろうその小屋はさびたトタンでつくった簡単なものだった。

孝太はドアノブに手をかけドアを開けた。途端にいい香りが孝太の鼻を楽しませる。

部屋の中も貧相な作りではあったがどこか温かみを感じた。

部屋の真ん中にぽつんと鍋が置いてあり、その中からいい香りがで  
ていた。

鍋の奥に男が座っていて鍋になにやら入れている。  
男は立てば2m近くあるだろうと思われた。顔は無精ひげを生やし  
ており、黒いコートを羽織っていた。

座っけていても孝太を圧倒するような迫力があつた。  
やはりさっきの男か……。

「ノックぐらいしろ……。失礼な奴だな。」

突然野太い声がした。

「え、あ……。すまない。」

突然しゃべりだした男に孝太はあせってしまった。

「まあ座れよ。」

男は鍋の前に孝太を呼んだ。

孝太の目の前においしそうな匂いが漂う。この「戦争」がはじまっ  
てからこんないいにおいは嗅いだこともなかった。  
と、ドアをノックする音がして明菜が入ってきた。

「孝太ああ！あ……。すいません。」

男をみて気まずそうに明菜が言う。

「はは、こつちのお嬢ちゃんは礼儀をちゃんと知ってやがる。」

ふいに男が笑い明菜はなんのことかわからないという風にキョトン  
としていた。

「お嬢ちゃんもこつちに座りなよ。」

男が言った。

ペコリ、と頭を下げ明菜がゆっくりと孝太の横に座った。

男は鍋の中に入っているスープを少し古めの茶碗にいれ、孝太に突  
き出した。

「飲めよ。」

孝太の目の前にはうまさうな湯気のたったスープがある。

「すまない。」

孝太はここ最近このような暖かいものを食べたことがなかった。い

や、それ以前にここ最近はまともな食べ物などにありつける状況ではなかったのだ。この「戦い」のせいで……。

スープはうまかった。久しぶりに胃を喜ばせられたようだ。

「ほら、お嬢ちゃんも。」

明菜は手を振って遠慮したが、お腹は遠慮をしなかった。  
ぐうう……。

静寂が訪れる。

明菜は少しうつむいて、恥ずかしそうに茶碗を受け取った。

孝太はスープを噴出しそうになるのを必死でこらえた。

目の前の茶碗は空になった。しばらくは動けそうにない。

明菜も同様だった。満足げだというように、足をひろげていた。

こいつはホントだらしねえなあ……。

孝太はそう思うと男のほうをみた。

「あんた、名前は？」

「そういうときは自分から言えよ。」

ああ、そうか……。

「孝太という。」

「まあ、知ってるけどな。このお嬢ちゃんが、お前の名前を大声で、  
叫んで、飛び込んできたからな。」

そういうと男は、はは、と笑った。

明菜は赤面し「すいません……。」と小さな声で言った。

「俺は哲という。まあ、テツさんとも呼んでくれや。」

テツか……。いい名前だと思った。

「テツ?! あの哲中尉ですか?」

明菜が叫んだ。

「やめてくれ、昔のことだ。」

テツが照れくさそうに言った。

「哲中尉?」

「孝太、知らないの? 第一次バグ討伐戦の最前線で生き残った10

人のうちの一人、「マット・ドッグ（狂犬）」と呼ばれて恐れられた軍人よ！」

あの討伐戦で生き残った？つくづくなんて男だ。

こいつなら地球を救える……。

そう思った。

「仲間になってほしい。」

孝太はそう思ったとたん、テツに向かって言っていた。

「一緒に地球を救ってほしい。」

「いやだな。」

哲が言った言葉に孝太は拍子抜けしてしまった。

「なぜっ  
・  
・  
・  
」

「どれ、お前らがきに第一次バグ討伐戦の話をしてやるか」

孝太の言葉を遮るように哲は話し始めた。

鍋の中の湯気がテツを隠した。

[illegible]

## 第5話：ヒゲツラ（後書き）

僕は本当に更新が遅いです。これは本当に悲しい。というか忙しい！でもがんばるのでよかったです。感想ください。とても励みになるのです。

次話でとうとうこの地球で起こっていることがわかります！（ん？前もどこかで書いたような・・・）

## 第6話：人は歩き出す

三年前のあの「地獄の光」が落ちたのは（第二話で孝太たちがみた光のこと）アメリカのど真ん中だった。

破壊力はすさまじくアメリカ全土どころではなくその外まで広がった。

日本は北部を完全にやられた。（孝太のところはぎりぎりの所だったのでかろうじて助かったが）

先進国はほぼ壊滅的となり、アメリカは戦闘能力をなくした。わずかに残った地球の軍はほとんどの勢力をかけて「未知の者達」に報復を考えた。

世界各国の軍あわせてその数、9000万。宇宙戦艦は2千隻が動員された。これは地球の宇宙戦でのすべての戦力だった。

結果は無残なものだった。

地球軍は奮戦したものの、1時間後にはたったの50隻になっていた。

退却命令が出たが地球にたどり着けたのは3隻のみだった。あとの約40隻は行方がわからないままである。

地球の司令部はあせった。残りの地球の軍は100万人ほどだった。多いように見えるが「侵略者」のやつらにはとうてい適う数ではない。

司令部は最後の命令を出した。いや、司令部はこのとき最後だとはおもわなかったろう。

わずかな軍を残して地球陸軍は地球に着陸してきた「侵略者」を食い止めようとした。これが後の第一次バグ討伐戦であった……。

「敵宇宙戦艦が着陸します！」  
部下が叫んだ。

でかい……。哲中尉は自分が震えているのがわかった。だが、それが恐怖からなのか、武者震いなのかはわからなかった。

「こんな奴に勝てるんでしょうか？」

自分の横にいる部下がそう言う。だが声は落ち着いていた。

さすが自分の部下だな、と哲は安易なことを思っていた。

「勝つしかないだろうが。逃げてもどの道死ぬだけだ。それなら・・・」

「なら、戦う。ですね？」

部下がにつこりと笑って哲が言おうとしたことを遮った。

哲はこの笑顔をみるといつも胸が痛んだ。

哲は部下の名前は聞かないことにしていた。聞いたらそいつを人間としてみてしまう。部下が死んだときそれを人間と思っては俺は恐怖に震えるだろう、と思ったからだった。

「そういうことだ。」

バグの戦艦がズズズ・・・というでかい音を出して着陸した。距離は2kmといったところか。それでも山ほどでかくはつきりと見えた。

哲は後ろを振り向いた。自分の部下は300名ほど。そのほかの部隊も後ろに見えた。

正直地球の軍は勝てないだろう。それはみんな思っていることだ。だが、この草原を埋め尽くすほどの「人」を見るとなぜか戦えるような気がした。

「俺たちは軍の先頭を突っ走る！敵はどういう奴かしらんが俺たちは目の前に現れた馬鹿どもを蜂の巣にするだけだ！」

部下たちが歓声をあげる。

「いくぞおお！」

走った。あのでかい「山」に向かって。

敵が戦艦からでてきた・・・。

哲の部隊の走りはとまった。部下たちは呆然としている。ズン。

ひとときわ大きい「足音」。

目の前にあわられたのは20mはあるでかい「虫」（形がカマキリに似ているため後に「マンティス」と呼ばれる）だった。その足元には俺たち人間ほどの大きさのこれまた「虫」がうじゃうじゃとうごめいていた。

「なんだ、あれは・・・。」

部下の一人がそうつぶやく。哲も驚いていた。

侵略者は当然変な機械にのっているタコみたいな奴か、人間のような形をしているとみんな思っていたからだ。

でかい虫がひとときわでかい声で耳障りな甲高い鳴き声をあげた。

「げえ、気持ち悪いな。俺虫は苦手なんすよ。」

俺の部下のムードメーカーが沈黙を破るようにそういった。

「テツ中尉、蜂の巣にしてやるんでしょ？早く行きましょや。」  
続けてそういう。そうだな、俺たちはいつも恐怖などなかった。

「そのとうりだ！奴らを「駆除」してやるぞ！虫なんかにこの星を渡すな！」

そう叫んで哲たちは走り出した。後ろにはたくさんの味方もはしっている。

キュウウウウン・・・。

光が哲の横を走った。あのひとときわでかい「虫」からだ。

大きい爆風・・・。

その「光」にあたった奴らはみんな消えていた。草原を埋め尽くす人だかりにその光が走った部分だけなにもなかった。

一瞬の静寂。

哲は自分がなんだかわからなくなった。恐怖はなかった。

「うわああああ！」

哲が叫んだ。みんなも突っ走った。

みんな自分が何をしているかわからなくなっていた。逃げるものはいなかった。

目の前に自分たちほどの虫が自分たちと同じように走ってくる。嫌



な「鳴き声」をだして。

哲の銃が火を噴いた・・・。

気づくと、哲は歩いていて。足がふらつく。

周りに人はいなかった。あれだけいたのがただの一人もいなかった。ただ一人荒れた荒野を歩いていて。

無残なものだった。

奴らの前にはわれらなどゴミに等しかった。そう、まるで人が「虫」をもて遊ぶように・・・。

司令部は最後の命令「退却」を命じた。遅い退却命令だった。

部下はどうなったかは知らない。おそらくほとんどが死んだであろう。

司令部は崩壊した。もう人間をまとめられるものは消えた。

各地にはわずかな兵が残っているだろう。だが、それはもう軍ではない。

この世界に戦闘能力はなくなった。残っているのは戦えない国民のみ。

哲はそう思っていた。重い足取りながら着実に「逃げて」いた。

だが哲の思いは裏切られる。残った国民はみな武器を取った。戦闘経験のないもの達だ。この美しい「地球」を守るため民間人は無謀な戦いに望んだ。ひにくにもこのとき初めて人類はひとつになった。残り人類約一億人・・・。

-

-

-

-

-

-

「それでお前たち、「対侵略者民間抵抗軍」ができたわけだ。」

哲は食後のお茶を飲んでそういった。

孝太たちもこの運動に参加した。とういうより動けるものはほとんど参加している。

バグたちにとつてはハエみたいなものだろう。それでも抵抗軍は各地でテロのような小競り合いをやってきた。

「俺はこの地球で暮らしたい。」

孝太が言った。

「そんなことは全員思ってる。」

哲がつぶやく。

「だったら、なぜ仲間に入ってくれない！」

「無駄だよ、この地球は。もう終わっている。戦っただけ無駄なことだ。」

「わからないだろ、そんなこと！」

「鍛えられた9000万人の兵隊でも適わなかったのか！」

哲が叫んだ。

孝太は黙ることしかできなかった。

「ところで、そっちのお穰ちゃんは何ていう名前なんだい？」

雰囲気をかえるように哲が明菜に向かって言った。

いままで黙っていた明菜が突然聞かれてびっくりとした。

「あ、明菜っていいいます。」

弱々しい声で言った。

こいつなりに空気読んでるんだな、と孝太は思った。

突然、哲は固まった。持っていた湯のみを落としてしまった。

明菜はあつ、と叫ぶとまるで悪いことをしたかのように「ぐっ、ぐめんなさい！」と謝った。

「明菜だと！」

突然哲は叫んだ。

「お前あの東条博士の娘か?!」

哲は驚いていた。

「そうですけど・・・?」

明菜の父は博士と呼ばれていた。軍で働いているなんてうわさも立っていたが、孝太に言わせればいつも外をぶらぶらしているただの変人だった。

「驚いたな・・・LAST KEYか！」  
ラスト・キー

哲は震えていた。

明菜はなんのことかわからないという風になっている。

「お前孝太、とかいったな。」

「ああ。」

孝太と明菜はなぜこの男がこんなに驚いているのかわからなかった。

「前言撤回だ、ボウズ。この地球は助かる！」

一瞬の静寂がおとずれる。

「仲間になろう。」

哲が言った。

## 第6話：人は歩き出す（後書き）

ここでやっとこの世界に起こっていることがわかりました。早くここを書きたかったです（笑）  
これからよろしくお願いします。

## 第7話：出発

哲はおおきな荷物をかかえて出てきた。重そうなものを片手で軽々と持っている。

つくづく化け物だな。

孝太は思った。

孝太の部隊である「狐の牙」はもうとつくに準備を終え、整列していた。

「ふん、なかなか骨のありそうな奴らだな。」

哲が鼻を鳴らして言った。

この廃墟に立てこもっていた隊長は哲をみて完全にびびっていた。

「お、お前あんなマンティス一体倒したぐらいで、い、いい気になるなよ！」

情けない……。

「隊長さんこの人は悪い人じゃ……。」

孝太はそこでいいとどまった。隊長でもないのに隊長というのは変だな……。

「そういえば隊長さん名前は？」

「私か？」

隊長が答えた。

「私は、李<sup>リ</sup>という。こいつは俺の一番の部下で、劉<sup>リュウ</sup>だ。」

先ほどの小柄な男が中国式の挨拶をした。

外国人だったのか……。

孝太は地図を広げた。リーさんたちを安全なところまで連れて行かなければならない。

「ここです。」

李が地図の真ん中のあたりを指差した。

そこには「B - 52 防塞都市」と書いてある。太い文字で書いてあり、重要な都市だとわかった。

「大きそうな街だな。」

哲がつぶやいた。

「自慢の街です。」

小柄な劉がにつこりと笑って答えた。

哲はまた胸が締め付けられたような気がした。

この戦いが始まってから俺は本当に人の笑顔が苦手になったのだ、そう思った。

バグが攻めてきてからというもののほとんどの重要な都市は破壊された。しかし一部の都市は要塞化し、隠れるようにしてかろうじてバグの侵入を防いでいた。

そこに残ったわずかな人類は住んでいた。

孝太もそういう街に住んでいたのだが、数ヶ月前完全に「破壊」された。孝太たちが食料を探しに外へ出たときであった。

孝太は町に戻って愕然とした。わずかな残骸を残して何もなくなっていた。

先ほど李の部隊が立てこもっていたのも昔に破壊された街のあとである。

孝太は街の位置を再び確かめた。ここからそう遠くない距離である。

「じゃあ、行くとしますか！」

明菜が狐の牙に指示しながら叫んだ。

哲がタバコを手にした。

「俺も行きたいところがある。」

哲が地図を指差す。そこには一面のさばく以外何も載ってなかった。

「さばくの真ん中へいつてどうする？」

孝太は尋ねた。哲がタバコに火をつけた。

「ん、行つてからの秘密。」

タバコの煙が空高く舞い上がった。

大地は荒れていた。この戦争が始まってから、豊かな緑は顔をあまり出さなくなり、文明の象徴ともいえた高いビル群は消えた。

ただ、ひび割れた大地だけだった。

砂煙が舞う……。孝太は目を細めた。

遠くにかすかな建物が見えた。

「あ、あれです！見えてきました！」

李が指をさして叫んだ。

「まだこんな都市が残ってるとはな。」

哲が自分の黒いコートを砂煙を避けるため頭から被ってつぶやいた。確かに大きい街だ、孝太は思った。だがなにか変だった。

足が勝手に動き出す。

「どうしたの？！」

明菜が叫んで追いかけてきた。しかし顔は厳しく、明菜なりにもなにか感じているようだった。

砂嵐が晴れて街がはつきりと見えてくる。

煙……！

街から黒い煙が出ている。

その下にウジャウジャとうごめく黒いものがみえた……。

明菜があっ、と口を押さえる。

哲たちが追いついてきた。

目の前の光景を見て哲がチツと舌を鳴らした。

李たちは膝をついていた。呆然としている。

「ここまでうごめかれたか……。」

哲がくそ！と叫んだ。

マンティスはいないようだ。

「いくぞ。」

孝太がナイフを取り出して言った。手が怒りで震えていた。

明菜や狐の牙がそれに続く。

哲は自分の鞆から大きな「銃」を取り出した。昔の時代で使われたシヨット・ガン（散弾銃）か……。

「そんな古い武器で戦うのか？」

孝太が尋ねた。

「お前らみたいに刀使ってる奴に言われたくねえよ。」

哲はタバコをフツと飛ばすとシヨット・ガンをガチャリと鳴らした。

走った。息の音が聞こえた。自分の息だけしか孝太には聞こえなかった。

静かだ・・・。

横には明菜が走っている。いつも俺の隣を支えてくれている。

孝太はそう思うといつも安心した気持ちにさせられた。

お前がいなかったら俺はこの戦いから逃げていたかもしれない。

俺は本当は地球を守るために戦っているんじゃないのかもしれない。

明菜と普通に暮らせればそれで十分だ・・・。

孝太はなぜそんな気持ちになるかわからなかった。

孝太は首を振って気を取り直した。バグとの距離が近くなる。

バグの甲高い鳴き声で孝太の静寂は破られた。

「明菜に触れさせるかぁー！！！」

・・・え？

孝太は思ったことが口に出たのかと思った。

しかし、孝太の口ではなかった。

哲だった。

明菜の前に哲が飛び出す。速い・・・。

「かかってこいやぁ！害虫どもお！」

シヨット・ガンのストンという発砲音。

改造してあるのか、一発で目の前にいたバグは粉々になった。

別のバグが哲の横から襲う。

哲はそれを素手で「殴った」。

ズド、という音。

バグのあの硬い甲羅はいともたやすく割れ緑色の虫の体液が噴き出した。



お前は人か・・・。

「もつとこんかいー！この程度かああ！」

バグたちは明らかにおびえている。哲は、わははと笑っていた。

哲は強すぎた。そして戦い方もうまかった。孝太が三匹倒す間にも  
う哲の周りに生きているのはいなかった。

明菜以外には・・・。

明菜は呆然としていた。なにもしないでいる。明菜の前をつねに  
哲が行き、大地を緑で染めている。  
なにやっつてんだよ、あいつらは。

哲のおかげか多そうに見えた虫もあつという間に片付いた。

バグはまだいたが、逃げ出していた。

孝太はあのバグが逃げ出すのをはじめて見た。

初めて勝った気がした。

だが、明菜はそれがいかにも不満そうにほほをふくらませていた。

## 第八話：人。

「なんであんなことするんだよー！」

明菜が哲に向かって叫ぶ。

「まあ、傷がつかないだけましじゃねえか、な？」

哲が必死になだめる。すると明菜はそれ以上何も言えなくなったのかむすつとして黙り込んだ。

しかしそこまでしてバグを殺したいと思う明菜もどうかと思うが（普通女だったら虫は見るのもいやなんじゃないのか？）、なぜ哲は明菜を、いや、明菜だけを守ったのだろうか。

孝太はそう思ってたはずねた。

「テツ、なぜこんな奴だけを守るんだ？」

「こんな奴って何だよー！」

明菜が叫ぶ。しまった、口がすべった・・・。

哲がはは、と笑った。

「お前らはほんと仲がいいな。」

「どこが！こんな奴ー！！！」

孝太は必死でそう言ったが明菜と声がそろってしまった。

「いや、そういうところ。」

哲が大笑いした。

「そいつはな・・・。」

哲が思い出したように孝太の質問に答えた。

「絶対に死なせてはならん。」

「そんなの当たり前だろ。誰だって死なせたくないよ。」

孝太が言う。

「そういうことじゃねえよ。」

哲は真剣な顔をしていた。

「今の地球を救えるのはこいつなんだ。」

哲の指先は明らかに明菜を指していた。

私?!という風に明菜はびくりしている。

「テツさん・・・私はそんなに強くないよ?」

「そうだよ、こいつは逆上がりできないんだぜ?!」

「ちよつ、孝太!今言つか普通?!」

明菜の顔が赤くなる。明菜は運動はできるほうだが鉄棒はからきし駄目だった。よくうなつてゐる所を冷やかしたものだ。

「そういうことじゃねえよ、馬鹿。」

あきれたように哲は言った。

「お前らと話していると頭がおかしくなりそうだ。」

よいしょ、と哲が腰をあげてほとんど壊れてしまった街を見る。

街の人はほとんど動かなくなっていた。

むっとするような焼けた臭いが孝太の鼻をつく。

李と劉はがつくりと膝について動かなくなってしまった人を抱きかかえていた。

孝太はなぐさめようと李の肩に手を置こうとしたが、その手は止まっていた。

李は泣いていた。

それでも泣き声はあげまいと必死に声をこらえていた。

孝太はそれをみて何を言つてよいのかわからなくなった。

「家族です。」

李が動かなくなった人を抱きながら言った。

苦しい・・・。

バグはこんなにたくさんの方の笑顔を奪つてどうするんだ。

俺たちの幸せを奪つてどうするんだ!

孝太はやりどころのない怒りをどうにもできなくてそばにあった石を蹴飛ばした。

蹴った足は痛くなったが、苦しさが少しまぎれた。

街は十字架で埋まった。生き残った街の人たちは手を合わせている。縦横にきれいに十字架が並んでいる。その中のひとつの前に李が立っていた。

墓の前にりんごを置いた。

「娘が好きだったんです。私はいつも娘にけむたがられていました。が。」

そう孝太にいうと、李はちょっと照れくさそうに笑った。

孝太は李の顔をまともに見れなかった。

「娘さん、きつとりんごを貰えて喜んでますよ……。」「孝太はそれだけしか言えなかった。

哲が廃墟となった建物にタバコをふかして座っている。

タバコの煙は空に吸い込まれるように消える。

孝太はその煙を追うようにして空を見上げた。

空には雲も何もなく、ただ青かった。

## 第八話：人。（後書き）

なかなか執筆が進まない・・・。  
読んでくれている方には申し訳ないです・・・。

## 第九話：砂漠

都市に生き残っていた住民たちはまた街の復興に取り掛かった。

李は涙を拭い立ち上がる。目にはしっかりとした光が宿っていた。強い男だ……。

孝太は思った。哲とはまた違った強さ……この強さがあるから人はここまでこれた。

「気をつけてな。」

孝太は李に言う。

李はまっすぐに孝太の目を見た。覚悟を決めた目だ。

「私も連れて行ってください。孝太さん。」

意表をつかれたように孝太はえっ？と言ってしまった。

「だめですかね？」

李はその反応をみて続けて言う。

「いや、構わないが……。」

家族の元にてやらないのか？と孝太は思った。

「家族の墓はこの街のみんなが守ってくれます。」

それに、と李は続けて言う。

「この地球の行く末をこの目で見てやろうと思ひましてね。」

「あなたがこの地球をどう変えるのか、ね。」

李の意思は固いようだ。

「私は別にいいけど？」

明菜が言う。

「たくさんいるほうが楽しいし！」

そう言うと、エヘヘ、と明菜は笑った。

「たくさんいるほうが少しでも有利だしな！」

そういうと、がはは、と哲は笑った。

なんだこのおっさんは……。

ともかく、李は喜んでいた。

確かにこの先俺の部隊だけでは先には進めないだろう。

孝太は李に向かって手を差し出す。

「よろしく願います。」

李は少し恥ずかしそうに笑って孝太と手を交わした。

「劉さんは・・・？」

明菜が李の後ろにいる小柄な男に向かって言う。

李が劉のほうを向いた。

「部下は上司の意思に従うものです。」

そういうと、劉はニコリと微笑んだ。

李の部下は街の防衛部隊を残して、街から500名ほどが加わった。この先は長い行軍になり、できるだけバグに見つからないように行動しなければならぬので大軍は連れて行けないのだ。

もともとこの街にいた部隊も残りわずかとなっていたのだが・・・移動にはバギーがかなりの台数用意された。驚いたことに侵略以前にあった大砲（野砲）も一基あった。

李がかなり苦労して手に入れたものらしい。

その野砲を車の後ろに牽引した。

「・・・。」

李が街をしきりに振り返る。

「無理しなくても、いいんだぞ？」

孝太は李にそういう。

「いえ、自分の故郷の姿をしつかりと目に焼き付けておこうと思ひまして。」

李はそういった後、なんでもないと云った風にこう続けた。

「それに・・・もうこの街を見るのも最後かもしれません・・・。」

「グッ、と孝太は胸が締め付けられる思いがした。自分が死ぬ覚悟を

決めること、それは傍觀者にとつてはつらいことなのかもしれない。李は相変わらず街をじっと見ている。

「きつと、帰ってくれるわ。」

孝太は自分にも言い聞かせるようにそうつぶやいた。

バギーは広大に広がる砂漠を走り出した。街は舞い上がる砂埃に消えていった。

孝太たちが乗っているバギーは哲が運転していた。  
ブウン！というなり声をたてバギーが飛び上がる。

「て、哲！運転が荒いぞ！！！」

「なんだ、小僧びびってんのか！隣の席の奴をみてみる！！」

「いっけええええええええええ！！！」

げ、元気だな、こいつ……。

あいかわらず哲はブンブンとエンジンをふかしていた。

う・ ・ ・ 。 ちよつと酔つたかもしれない・ ・ ・ 。

と、明菜の叫び声が聞こえないのに気づいた。

横を見ると、さつきまで車から乗り出していた明菜は自分の席に戻ってうつむいている。

どうしたんだ？

「じめん……吐きそう……。」

.....つ!!!!!!

全てのバギーは砂漠の真ん中で急停止した。

明菜は石の上に座って、空を見上げていた。孝太はその横にゆっくりと腰掛ける。



「やれやれ、お前はホントに災難を呼ぶ女だな。」

ふう、と孝太はため息をつく。

「ご、ごめん・・・。」

明菜は恥ずかしさで顔を少し赤くしながらも相変わらず空を見続けていた。

雲ひとつ無い空。

真上にある太陽の光に照らされている明菜の横顔に孝太はどこか美しく感じた。

「ま、まあみんなも疲れてたからいいんだけどな。」

なぜか孝太はその横顔が直視できずに慌てて目をそらした。

「うん、ありがと。」

明菜が言う。

・・・・・・。

静寂が訪れた。

といつても、周りの連中は相変わらず騒いでいる。哲などはどこから手に入れたのか酒ビンを持ち出し、今にも宴会でも始まりそうな雰囲気だった。

ただ二人だけはその雰囲気からはずれ、ただ二人とも空を見上げていたのである。

・・・・・・。

孝太はえも言われないような不思議な感じに包まれていた。

というのも幼い時からの付き合いでこいつ（明菜）とこんなにも無言で過ごした時間はなかったのだ。

ふう、と孝太はまたため息をつくとその雰囲気から逃げるようにゴロンと石の上に寝転がった。

太陽の熱で暖められた石は少し熱かったが視界には青い空が広がった。

「よいしょ。」

明菜がつられたように孝太の横に寝転がった。  
すぐ横には明菜の顔がある。

なぜかわからないが孝太は自分の顔が赤くなるのを感じていた。

「ね、孝太。」

「おう。」

突然明菜に声をかけられ少し動揺して孝太が答えた。

「今なら、孝太が空を好きな理由がわかるかもしれないな。」

「え？」

「なんかさ、こう大きな空を見てると自分がどれだけ小さいかわかっちゃってさ。それで、その小さい自分の悩みなんてもつと小さいんだなあって思っ、て、というか悩みなんてなかったかのように感じるって言うか、なんていうか・・・。」

「何が言いたいのかさっぱりわからん。」

「もう！君にはわかんないのかね！この純情な心が！」

これだから男は、とでも言うように明菜はやれやれと首を横に振った。

孝太は明菜の言ってることがわからないでもなかった。あの広い空を見るとささいな悩みなんてどうでもよく感じることはいくらでもあったのだ。

「お前に純情な心があるとはおどろきだな。」

「な、なんだとお！」

ゴツン！という衝撃が孝太の頭を襲う。横を見るとムスツとした明菜の顔があった。

「い、いてえ・・・。」

「私を馬鹿にした罰だ！」

明菜はそういうとフンとそっぽを向いてしまった。

やれやれ・・・ホントに冗談の通じない奴だ・・・。

孝太は腫れた頭をさすりながらそう思った。

「おい！お前らそんなとこでイチャイチャしてないでこっち来て一緒に飲もうぜ！」

哲が呼んでいる。

「べ、別にイチャイチャなんて・・・！」

「いいから早く来い！」

孝太と明菜が同時に起き上がり、同時に反論したのを制して哲が叫んだ。

「ふう・・・じゃあ行くとしますか。」

「うん！」

孝太が言つと明菜が元気に答える。

あの空がいつまでもこの隣にいる元気な奴の為にきれいな青でいてほしい。

孝太は空を見上げふと、そう思った自分が少し恥ずかしかった。

## 第九話：砂漠（後書き）

長い間更新できなくてすいませんでした・・・。

忙しくなってきたので更新は遅くなるかもしれませんがどうか暖かい目で見守ってやってください！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1291a/>

---

地球侵略

2010年10月28日08時53分発行